KYOMI

こだわり三信社員が贈る、興味しんしんプレミアム雑学誌

SINSIN

第13号

選手への取材
ショート動画は
こちらから

2024年パリ開催 国際大会 ローイング日本代表選手

ローイングアスリートの軌跡

プレミアムエッセイ

さだまさし『鬼平』自慢

こだわり三信社員が贈る、興味しんしんプレミアム雑学誌

KYOMI

SINSIN

Interesting Journal 2025.10 第13号

Contents

2024年パリ開催 国際大会 ローイング日本代表選手

ローイングアスリートの軌跡 ……P1

2024年、パリで開催された国際大会にローイング競技の日本代表として出場した宮浦真之氏と古田直輝氏。夢の大舞台を経て、新たな目標に挑むアスリートの姿をお届けします。

プレミアムエッセイ

さだまさし『鬼平』自慢 ……P9

今回も、さだまさしさんのこだわりのエッセイをお届けします。

KYOMI SINSIN 総集編（創刊号〜第6号）……P11

その道をひた走るプロフェッショナルを取材し、豊かな暮らしづくりにつながるヒントを紹介してきました。創刊から6年、プレミアム雑学誌としての成長点を迎えた今、三信社員に新たな気づきを与えたこだわりの数々を振り返ります。

【KYOMI SINSIN】とは

「世の中の様々なヒト・モノ・コトに潜む、様々なこだわりに光を当て、皆様の暮らしに“興味しんしん”の豊かさをお届けしたい」。『KYOMI SINSIN』は、そんな想いから三信社員が編集長／プレゼンターとなってお届けするプレミアム雑学誌です。

水上を舞台にした「究極の団体スポーツ」ローイングの選手として限界に挑み続ける

「春のうららの 隅田川 のぼりくだりの 船人が」瀧廉太郎の作品「花」にある一節は、隅田川で行われるレガッタ（ボート）の様子を歌ったものです。名曲誕生から120年余り。水辺資源に恵まれる日本ではレガッタ、カヌー、カヤックなど、さまざまな水上競技が親しまれています。なかでも、「ローイング」は4年に1度開催される国際大会の正式種目に採用される人気競技です。今回、プレミアム・プレゼンター道端勇樹の学生時代の先輩で、日本を代表するローイング選手の宮浦真之氏と古田直輝氏にアスリートとしてのこだわりを伺いました。

PROFILE

NTT東日本 漕艇部 漕手（右）

宮浦 真之 *Masayuki Miyaura*

1996年7月15日生まれ。石川県出身。2018年、アジア競技大会 男子軽量級ダブルスカル優勝。23年・24年、ワールドカップ 男子軽量級ダブルスカル出場。24年、パリオリンピック アジア・オセアニア大陸予選およびアジアカップ 男子軽量級ダブルスカル優勝。パリオリンピック 男子軽量級ダブルスカル14位。

NTT東日本 漕艇部 漕手（中央）

古田 直輝 *Naoki Furuta*

1996年9月27日生まれ。鳥取県出身。2021年、東京オリンピック アジア・オセアニア大陸予選 男子軽量級ダブルスカル優勝、東京オリンピック 世界最終予選 出場。24年、パリオリンピック アジア・オセアニア大陸予選およびアジアカップ 男子軽量級ダブルスカル優勝。パリオリンピック 男子軽量級ダブルスカルに宮浦氏と出場し14位となる。

一心同体の絆で世界と戦う2人のローイングアスリート

2024年、パリ開催の国際大会にローイングの日本代表として出場

豆知識
あの文豪もローイング競技者だった！
夏目漱石は学生時代から漕艇に親しみ、英語教師として赴任した第五高等学校（現熊本大学）では漕艇部の部長を務めました。

皆さんは「ローイング」をご存じでしょうか。競技者がオールを使ってボートを漕ぎ、ゴールまでの着順を競う水上スポーツです。聞き慣れない方もいるかと思いますが、2023年に「ボート」から「ローイング」に名称が変更されました。現在、国内最高峰の選手が出場する全日本ローイング選手権大会をはじめ、中学、高校、大学、マスターズクラスの全国大会などさまざまな大会が開催され、日本の競技者数は約1万人を数えます。日本におけるローイングの歴史は古く、国内で初めてボートが漕がれたのは江戸時代末期。明治時代に入ると「漕艇（そうてい）」として学生や大人の間で親しまれ、日本各地に漕艇部や大会が次々に誕生し、ローイング競技の礎が築かれました。

今回のプレミアム・プレゼンターを務める私、不動産部所属の道端は高校生の頃からローイングに取り組んでいます。自身の成長を測定タイムで実感できたことが嬉しく、一気にのめり込みました。明治大学の漕艇部では、同志たちと切磋琢磨しながら練習に励み、名門漕艇部の威信にかけて大会優勝や日本代表選出を目指しました。社会人となった今も自宅にローイングのトレーニング機器を設置し、早朝や週末に練習するなど、ローイングは私のライフワークになっています。

そんな私の憧れが、ローイング選手の宮浦真之氏と古田直輝氏。お2人は学生時代の先輩です。宮浦氏は高校時代の先輩で、当時から全国大会に出場するほどの身近なスター。古田氏とは大学の漕艇部で出会い、国際大会で活躍する陰でストイックに日々練習に励む姿が印象に残っています。両氏は2024年にパリで開催された国際大会に男子軽量級ダブルスカルの日本代表として出場しました。憧れの先輩がパリの水上コースを力強く走っていく映像を見て、心が熱くなったことを覚えています。その大舞台から約1年が経過した2025年6月、第75回全日本社会人ローイング選手権大会 男子ペアに出場し、息の合ったストロークで滑走して見事優勝。桟橋には栄冠に沸く人々が集まり、2人の帰還を今か今かと待ちわびます。ボートが着岸すると称賛の声と拍手は最高潮に。花道をつくる仲間の祝福に応えながら颯爽と歩く姿からは、世界の第一線で戦うアスリートのオーラが漂っていました。

大会で優勝トロフィーを掲げる宮浦氏と古田氏

お互いを知り、共に鍛え、たどり着いた「同調」の漕ぎ

日本を代表する選手である宮浦氏と古田氏に、その強さの源や大舞台を終えた今の心境をぜひ聞かせていただきたいと思い、訪れたのは埼玉県戸田市の戸田ボートコース。全長約2.4㎞、国内唯一の人工的に造られた静水ボートコースは、高度経済成長期のさなか、清らかな水質が競技適地としての評価を高め、現在までに国際大会や全日本選手権など数多くの大会が開催されています。『近代ローイングの聖地』戸田ボートコースのそばに、両氏が所属するNTT東日本漕艇部の施設があります。初めての取材のため普段と違いかしこまる私を見て、お2人は気さくに話しかけて場を和ませてくださいました。おおらかで優しい人柄は学生時代のままです。

まずは施設に伺ってトレーニングを見学させていただくことに。2025年4月に完成したばかりの施設には、強豪チームの体づくりを支えるトレーニング機器がずらりと並

びます。古田氏が行うのはハイクリーンというトレーニングです。100kg近いバーベルを素早く持ち上げる動作を繰り返し、ローイングに必要な全身の筋肉を鍛え、下半身から上半身への筋肉の連動性を高めます。

ボートを漕ぐ一連の動作を鍛える機器、ローイングエルゴメーターを使ったトレーニングでは、力感の無いゆったりとしたフォームで漕ぎ出したかと思いきや、秒を追うごとに腕や脚に力がみなぎり始めます。漕ぐテンポはどんどん速くなり、ついにトップスピード。力強い漕ぎで機器のホイールが激しく回転し、鋭い風切り音が室内に響き渡ります。ストロークの迫力もさることながら、目を見張るのは映し鏡のようにシンクロした動き。トップスピードで漕ぎ続ける極限状態でも、一連の動作や呼吸のタイミングに少しの乱れもありません。それもそのはず、同年代のお2人は中学時代に大会で顔を合わせて以来の旧知の仲で、お互いを合理的な性格と認め合う関係です。論理的思考を活かして漕ぎの特徴を分析し合い、理解を深めながら練習を重ねて一心同体の境地にたどり着きました。

「ダブルスカルでは宮浦の心境や体調まで感じ取れます。『今日はあまり体が動けてないな』など、漕ぎ始めたらすぐに分かります。お互いに心を通わせて、1人ではできない疾走感を生み出せるのがダブルスカルの魅力です」（古田氏）

「古田のペースに合わせるのが私の役目。古田の動きだけでなく、加減速しながら進むボートの動きに合わせて漕がないと失速してしまいます。ダブルスカルには2人とボートを三位一体にする難しさがあり、日頃から動きを『同調』させる意識で練習しています」（宮浦氏）

ローイングエルゴメーターで息の合った動きを見せる宮浦氏と古田氏

心技体を磨く日々。その努力が実り、2人で掴み取った「パリ行きの切符」

アスリートの成長を支える「オン・オフの切り替え」

ローイングに励む私としては、トレーニングや生活習慣もぜひ参考にしたいところ。宮浦氏は全身の筋肉を連動させる競技特性をふまえて、「選手としての基礎能力を高めるには、全身の筋肉を鍛えられるローイングエルゴメーターを使用したトレーニングは欠かせません」と話し、古田氏は筋力を高めることの重要性を説いたうえで、私の特徴に合わせてアドバイスしてくれました。

「筋肉をつけ過ぎてしまうと体が動かなくなります。道端くんの良さである軽量級の枠に収まらないスピードを生む漕ぎを活かすのなら、基礎となる体力や技術をしっかりと積み重ねるのがいいと思います」（古田氏）

お2人はNTT東日本漕艇部に入部後、選手と社員の二足の草鞋（わらじ）を履いてきました。私はといえば平日は仕事、休日は練習やトレーニングに没頭してしまい、食事がおろそかになることもあります。私の性格や嗜好をよく知るからこそ、仕事と体づくりを両立するポイントにも言及します。

「体づくりで大切なのは、たんぱく質・脂質・炭水化物のPFCバランスがとれた食事。道端くんが好きなお菓子はほどほどがいいかも（笑）。でも、食事を節制し過ぎるとモチベーションが上がらないので、好きなものは我慢せず適度に食べましょう」（古田氏）

「オン・オフの切り替えをはっきりさせることが大切です。限られた練習時間に集中してエネルギーを出し切り、休む時は思いっきり遊んで、食べて、眠ってしっかりリフレッシュする。メリハリのあるサイクルを意識すると、仕事にもローイングにもより良いコンディションで臨めるようになると思います」（宮浦氏）

ローイングエルゴメーターでタイム測定に挑戦する道端

豆知識
ローイングにも一刀流と二刀流がある！
オールを1人1本持って漕ぐスイープ種目と、オールを1人2本持って漕ぐスカル種目があります。

「一戦一戦に全力を出し切る」夢の大舞台で貫き通した信念

宮浦氏と古田氏を語るうえで欠かせないのが、2024年に開催されたパリの国際大会です。その大舞台への道のりにはそれぞれの想いがありました。古田氏は2021年に開催された東京での国際大会の男子軽量級ダブルスカル アジア・オセアニア予選、世界最終予選に出場したものの、「あと一歩のところで国際大会への出場は叶いませんでした。予選を順調に勝ち進んだこともあり、大事なレースで『出場権を獲る！』という強い気持ちを出し切れなかった。パリまでの3年間は、負けた原因を分析して改善・成長することに集中しました」と振り返ります。

一方、宮浦氏は選手としての岐路に立っていました。「2020年から日本代表として国内外の大会に出場しましたが思うような結果が出ず、2023年の終わりにはプレッシャーやストレスから競技に臨むモチベーションが尽きかけていました」。前向きな性格の宮浦氏に訪れた窮地が、日本代表が背負う想像し得ない重圧の大きさを物語ります。

パリの国際大会が翌年に迫るなか、宮浦氏を奮い立たせたのはアスリートの矜持（きょうじ）でした。

「モチベーションの低下を理由に夢を諦めたらずっと後悔すると思いました。大会に出場できる・できないに関わらず、目の前の一戦一戦に全力をぶつけようと気持ちを切り替えました」（宮浦氏）

紆余曲折を経たお2人がペアを組んだのは、なんと大会開幕の4か月前。中学時代からの間柄で、NTT東日本漕艇部のチームメイトでもある2人に連携面の不安はありませんでした。私は憧れの先輩のペア結成に胸が高なりました。宮浦氏は「古田とペアを組むと決まった時は『高いモチベーションでパリを目指せる』と思いました」と当時の心境を話し、古田氏もペア結成から歓喜の瞬間までを振り返ります。

「宮浦と全力を出し切れば結果はついてくると感じました。アジア・オセアニア予選では力むことなく平常心で臨めたことが出場権獲得につながったと思います」（古田氏）

私は当時のお2人を思い出して嬉しさがこみ上げてきました。憧れの大会を目指して強度の高いトレーニングを積み重ねる日々。学生時代から掲げる「目標達成に必要な努力を惜しまない姿勢」を貫いた両氏は、目標にしたい人生の大先輩だと再認識しました。

パリで開催された国際大会の男子軽量級ダブルスカル。夢の大舞台に出場した両氏の結果は14位でした。古田氏は「各国で予選を勝ち抜いた代表選手が集まる会場は緊張感で張り詰めていました。そこでレースするのは刺激的でしたし、メダリストの巧みなレース運びを間近で感じることができました」と感想を口にします。宮浦氏は「一戦一戦に全力を出し切るというポリシーは貫き通せました」と言い切り、「日本代表がメダルを獲ることは遠い目標ではないと感じました」と今後への期待が膨らむ言葉も。その晴れやかな表情は、目標に向かって全力を出し切ること、悔いなく生きることの素晴らしさを映し出しています。

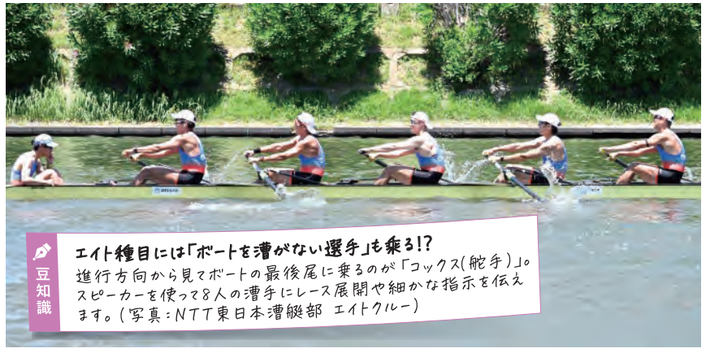
豆知識
あの国際大会で100年以上前から採用されているスポーツ！
ローイングはオリンピック競技として歴史が古く、1900年開催の第2回パリ大会から実施されています。なお、第1回アテネ大会では悪天候のため実施されませんでした。

1人の競技者、クルーの主軸として高い目標にチャレンジし続けたい

夢舞台を経て見つけた新たな目標、世界で戦える常勝クルーをつくる

2028年、ロサンゼルスで開催される国際大会で男子軽量級ダブルスカルは除外されることになりました。お2人は選手としてさらに成長するべく、軽量級の枠を超えた体づくりに取り組んでいます。古田氏は「体重制限がないオープン選手として結果が伴えばロサンゼルスを目指すかもしれませんが、今は自身のパワー・スタミナの限界を知りたいという気持ちでいっぱいです」と充実感を滲ませます。宮浦氏も「体重の制約がなくなれば漕ぎ方やトレーニングに新しい手法を取り入れることができます。古田と同じく、自身の可能性を追求して、より高いレベルに行きたいです」と前を向きます。

さらに、今後の目標として口を揃えるのが、NTT東日本漕艇部としての全日本ローイング選手権大会 エイトの10連覇。エイトとは約17mのボートを8人で漕ぐ、ローイングで最もスピードが出る花形種目です。同部男子キャプテンの宮浦氏は「世界レベルで戦えるエイトクルーをつくりたいです。部内には実力者が揃っており、個の力をさらに伸ばしていけば競合と一線を画すパフォーマンスを発揮できると確信しています。10連覇は高い目標ですが、世界に挑戦するには達成しなければなりません」と決意を口にします。8人の一糸乱れぬ漕ぎにより、ぐんぐんと進んでいくボート。水上を滑るように進む華麗さと、アスリートが全身の筋肉を駆使して漕ぐ豪快さの対比こそエイトの魅力です。「エイトほど『チームワーク』が結果に表れる競技は無いと思います。8人全員が寸分違わず動きを揃え、シンクロ状態を5分以上維持しなければならない。強いクルーほど動きが揃っていて美しいです。皆さんにもぜひ会場で観戦していただきたいです」(古田氏)



豆知識 エイト種目には「ボートを漕がない選手」も乗る!?
進行方向から見てボートの最後尾に乗るのが「コックス(舵手)」。スピーカーを使って8人の漕手にレース展開や細かな指示を伝えます。(写真:NTT東日本漕艇部 エイトクルー)

最後に、アスリートとして挑戦し続ける原動力をお聞きしました。

「中学生の頃にローイングを始めて、タイムを通して自分の成長を感じられることが喜びでした。その気持ちは今も変わりません。自身とクルーの可能性を追い求めるのは私にとって本能的なことで、そのひたむきな姿勢が道端くんをはじめとした後輩たち、そしてローイングを観戦する人たちの活力になれば嬉しいです」(宮浦氏)

「ローイングが好きだから競技を続けられていると思います。パリの国際大会後に大きなケガをして3か月近く練習できず、快復してボートを漕いだ時に幸せを実感しました。もしも今日、選手生命が終わっても『やり残したことはない』と胸を張って言えるよう、一日一日全力で競技に向き合っていきたいです」(古田氏)

取材を終えて練習に励む先輩の背中は、競技者として今、この瞬間を謳歌する歓びであふれていました。

NTT東日本漕艇部の公式サイトはこちら

Challenge!

13号プレミアム・プレゼンター 不動産部 横浜営業所 道端勇樹 第75回全日本社会人ローイング選手権大会への挑戦

大学時代から磨いてきた一体感のある漕ぎを見せる道端・石畑ペア

2025年6月21日・22日に埼玉県戸田市・戸田ボートコースで開催された第75回全日本社会人ローイング選手権大会。道端は、大学時代のチームメイトである石畑と共に男子ダブルスカル「B1000m」に出場しました。

予選を勝ち抜き、迎えた決勝戦。時折強い風が吹いて波立つコースコンディションでしたが、持てる力を発揮することに集中しました。上位入賞を目指し、緊張感が漂うなか出艇! しかし、スタートが思うようにいかず、先頭グループから想定以上に離される展開に。後半の巻き返しを図るもスタミナ不足でスパートがかからず、結果は6艇中5位。同僚たちの熱い応援が聞こえないほど集中して漕ぎ続けましたが、苦い結果となってしまいました。悔しさをバネに、すでに気持ちを切り替え、来年の同大会に照準を合わせています。課題はスタミナ強化と大学時代の力強い漕ぎを取り戻すこと。今号の取材で、宮浦氏と古田氏から直々にトレーニングを指導していただきました。ローイングエルゴメーターを使ったタイム測定では、お2人に「GO、GO!」「いいぞ!」と激励いただき好タイムを出すことができ、メーカーごとのボートの特徴や海外選手が使用するボートの傾向といったマニアックな情報もお聞きすることができました。

いまや日本ローイング界を代表する宮浦氏と古田氏ですが、私はこれまで後輩として、日本のトップ戦線に挑む姿や、海外選手のレベルの高さに打ちのめされる姿を目の当たりにしてきました。常に諦めることなく、現状を冷静に分析して目標を立て、最善を尽くしトレーニングに励み、トップ選手の階段を駆け上がっていきました。そんな不屈のアスリートからの助言は宝物としか言いようがありません。

宮浦氏と古田氏を見て、お互いを高め合えるペアを目指し、勝ち抜きたいという想いが強くなりました。猛然と漕ぐ私のペースに合わせてくれる長年のペアの石畑は頼もしい存在です。「道端は淡々としているけど、実は寂しがり屋」といじられることもありますが、石畑のおおらかな人柄にいつも助けられています。これからも切磋琢磨して、来年こそは大会で好成績を残します。さらに、ローイングで養った心身を駆使して、仕事にも精一杯取り組みたいです。限界に挑戦し続けるお2人のように私も自身の限界を決めることなく、仕事に、ローイングに、さらに上の結果を目指して邁進していきます。

レースを終えた道端と石畑。
来年の同大会に向けて静かに闘志を燃やす

KYOMI

SINSIN 総集編

創刊号～第6号

『こだわり人』の熱い想いを、温故知新の精神で振り返る

三信社員が興味関心を持つジャンルを深掘りして紹介してきた『KYOMI SINSIN』。創刊から6年、第一線を走るさまざまなプロフェッショナルに登場いただきました！

「三信社員が自らプロフェッショナルを取材する」という挑戦により、不動産業界の枠を飛び越え、その道を究める方々の熱い想いとこだわりが詰まった記事を届けてきました。

今回は、初期に誌面を飾ったこだわりの数々を振り返ります。日本が世界に誇る靴職人やモビリティのさらなる可能性を追求するスペシャリスト、日本のプロ野球界を代表する名選手など、多彩に活躍する姿を通して、その生きざまや取材の臨場感をあらためて感じていただけたらなによりです。今後も『こだわり人』の熱量が伝わるプレミアム雑学誌として暮らしを豊かにするライフスタイルを発信していきます。好奇心と情熱にあふれる三信社員、そして『KYOMI SINSIN』に引き続きご期待ください。

Date:2019/4

創刊号 紳士靴メーカー

オーダーメードを超える。

株式会社ヒロカワ製靴 代表取締役社長 **廣川 雅一氏**

昭和39年創業の紳士靴メーカー2代目である廣川氏は、革靴ブランド『SCOTCH GRAIN（スコッチグレイン）』の立ち上げに携わり、靴職人として一人ひとりの足になじむ一足を手掛けています。「オーダーメードを超える」と称する『SCOTCH GRAIN』の履き心地。フランスやドイツの革なめし業者から厳選した革を使い、履く人の足になじむまで長く履き続けられるよう手間をかけてソール・リブ・アッパーを縫い付けるグッドイヤーウエルト製法、足裏をローリングさせる歩き方に合わせて設計された靴底形状など、いくつものこだわりが幾重にも重なり快適に履き続けられる革靴は完成します。

オーナーが履き続けた靴のインソールを手に、廣川氏は革靴の魅力を「自分だけの靴に“育てる”喜びがある」と話します。大切に履き続けるにつれて付いたインソールの足形は、ともに歩んだ時間と革靴への愛情の深さを物語ります。実直な革靴づくりの支えについて「最後は好きになることだと思います。その仕事が好きだからもっと知りたい、もっと考えを深めたいと思える」と口にする廣川氏は、これからも履く人の人生に寄り添う一生ものの革靴をつくり続けます。

Date:2020/1

第2号 ハンドメイド自転車工房/オーダーメイド自転車ブランド

0.8馬力で挑む、人力の地平線。

今野製作所／CHERUBIM 代表取締役兼フレームビルダー **今野 真一氏**

自転車の車体をつくる職人「フレームビルダー」。世界から注目を集める今野氏は、自転車ブランド『CHERUBIM（ケルビム）』のチーフビルダーとしてサイクリストの体型、能力、用途に合わせて世界に1台の自転車を生み出しています。炎で溶かしたロウを巧みにあやつり、11本のパイプをフレームへと組み上げていく重要な工程。「ネジの1本さえ足し引きできない自転車のフレームに革新を生み出したい」と大志を抱く今野氏は、パイプ1本1本の特性、季節ごとのパイプのコンディションや溶接具合を見極め一発勝負に挑みます。

『CHERUBIM』の自転車は、コンマ何秒を争うレーサーからも信頼されています。名声を轟かせ、賛辞を贈られるトップビルダーとなった今もなお、今野氏は骨の通った“反骨”の精神で工房に立ちます。「こだわりは言うなれば“冒険心”。『あの地平線を越えるとどんな世界が広がっているのだろう』という冒険心を持った誰かがきっと自転車を生み出し、進化させてきたのではないでしょうか。こだわりとは凝り固まっているのではなく、常に動き続け、挑戦し続けるエネルギーだと思います」と語りました。

Date:2022/4

第6号 元プロ野球選手／監督（2024年 野球殿堂入り）

好きこそ夢を叶えるチカラ。

日本プロ野球名球会 理事 谷繁 元信氏

横浜大洋ホエールズ（現・横浜DeNAベイスターズ）で名捕手としてのキャリアを重ね、プロ野球歴代1位の3,021試合出場など輝かしい記録を残した谷繁氏。横浜のレジェンドは今、日本プロ野球名球会の理事として野球界の発展に取り組んでいます。現役時代から長年にわたり暮らす横浜は、谷繁氏にとってひとしおの愛着がある街です。『横浜愛』をテーマにした本号では、横浜DeNAベイスターズの大ファンで横浜営業所 所長の斎藤がプレミアム・プレゼンターを務め、横浜スタジアムを舞台に谷繁氏の取材を実施しました。

谷繁氏の選手、監督としての活躍の陰には確固たるこだわりがあります。捕球のしやすさを追求した小ぶりのキャッチャーミット、監督として選手一人ひとりとの対話を重視するコミュニケーション方法など、それまでの主流にとらわれない“谷繁流”を貫いてきました。「子どもの頃に父の影響で野球を始めたんですが、運良くといいますか、これまで野球が嫌いになったことは一回もないんです」と言い切る谷繁氏。その表情はまるで野球少年のようでした。“好き”という気持ちがあるからこそ、“こだわり”が生まれる。くったくない谷繁氏の言葉は、横浜好きの斎藤にとってより良い街づくりへの想いを強くする金言になりました。

Date:2021/10

第5号 有機農産物の生産販売

自然と共存する有機野菜づくり。

農業生産法人 株式会社 オーガニックネットワーク 代表取締役 石井 宏治氏

『オーガニックネットワーク』は南アルプスを望む山梨県の小淵沢で有機野菜を生産しています。陽ざし照りつける時期に訪問すると、畑は草が伸び、ミツバチやクロアゲハなどの昆虫が行き来する、まさに“自然そのもの”の畑。自然に限りなく近い環境のなかで、トマト、ナス、ピーマンといった夏野菜は色鮮やかに実ります。石井氏は「草だらけのなかにさまざまな生き物がいることが私にとって自然でしたし、野菜が輝いています。土もミミズや微生物の働きによってどんどん良くなるんです」と笑みを浮かべます。

石井氏には美味しい野菜づくりとともに情熱を注いでいることがあります。それは、野菜に込めた想いや情報をお客様一人ひとりに届けること。毎週、収穫した野菜を車に積んで首都圏の料理店などに自ら配送する取り組みです。「興味を持っていただき、畑で農業体験をするオーナー様も。私たちの野菜への理解を一層深めていただけました」と石井氏は手応えを感じています。

取材陣を案内する最中、石井氏は畑で突然足を止めると「このナス、きれいだ」と口にする一幕も。野菜、草、虫、土……、自然をかたちづくるすべてを愛でる石井氏の深い愛情こそ、野菜にとっての大事な栄養分なのです。

Date:2021/2

第4号 アウトドア用品総合メーカー

大自然の中で、頼りになる存在。

キャプテンスタッグ株式会社 代表取締役社長 髙波 文雄氏

新潟県三条市で生まれた『キャプテンスタッグ』。日本初のバーベキューコンロをはじめ、現在では２万点にも及ぶアイテムを取り扱うアウトドアのメジャーブランドです。髙波氏の「こんなアイテムがあったら便利だろうな」というユーザー視点の発想と遊び心をちりばめた製品群は愛好家から多くの支持を集めています。

取材した不動産部 金子は『キャプテンスタッグ』のキャンプ体験に参加しました。金子はインストラクターの手ほどきを受けながら、テントを設営し、野外でキッチンアイテムを使用するなかで、使う人の立場に立って製品を開発する髙波氏の熱意を実感。『キャプテンスタッグ』の製品に込められたこだわりと自然の中で火起こしを成功させる達成感を学んだデイキャンプは、金子にとってキャンプの魅力を再認識するひとときになりました。

髙波氏は「ものづくりはつくって終わりではありません」と一言。「私にとってこだわりとは、挑戦と努力と遊び心。製品に改善点はないか、お客様に製品の魅力が伝わっているかなど、より良い製品を追求しています」。愛好家から信頼されるものづくりの根底には、髙波氏の尽きることのない制作意欲がありました。

Date:2020/8

第3号 自動車用チューニングパーツメーカー

光明の先に広がる、最高時速315㎞の世界。

株式会社HKS テクニカルファクトリー 代表 菊池 良雅氏

日本で先駆けてエンジンのパワーを引き上げるターボチャージャーを取り扱った自動車用チューニングパーツメーカー『HKS』。創業者の「世界一のオリジナルなレーシングエンジンをつくる」という思いは『HKS テクニカルファクトリー』に受け継がれ、菊池氏率いる開発チームは1000馬力の『神風R』を誕生させました。0.001㎜に及ぶエンジン部の調整を重ね、つくり上げられたモンスターマシン。タイムトライアル直前のエンジントラブルを乗り越え、富士スピードウェイで周回1分41.364秒、最高時速315㎞という記録を叩き出しました。

タイムトライアルの開始が迫る緊急事態のさなか、菊池氏は懸命の回復処置を試みるメカニックに「950馬力ではダメだ。1000馬力にしろ」と指示を出しました。「人は極限状態に置かれるとつい、見えてきた光にすがりたくなる。けっしてそうじゃない。その先に本当の光明はあるのかもしれません。真っ暗だからこそ、よく目を凝らして先を見なければならないんです」

菊池氏はこだわりを「探究である」と話します。菊池氏率いる開発チームは瀬戸際でもエンジン、そして自身の可能性を信じ抜き、『神風R』のサクセスストーリーを完成させました。

今号のプレミアム・プレゼンター　*The premium presenter of this issue*

水上スポーツ「ローイング」のトップ選手が貫く、変化をおそれず、自らの可能性を追求するアスリート魂に迫ります。

不動産部 横浜営業所の道端勇樹と申します。2025年に入社5年目を迎えました。現在は事業用地の仕入れを通して価値ある街づくりに携わっています。日々責任ある仕事に没頭する私にとって、仕事と同様に力を注いできたのは「ローイング」。ボートを漕いで着順を競う水上スポーツで、高校から競技を始め、大学では全日本選手権大会に出場し、「男子舵手なしペア」種目で日本一になりました。競技者としては一線を退きましたが現在も体づくりは続け、2024年に大会へ出場してからは“ローイング熱”が高まっています。

今回、KYOMI SINSINの取材テーマを考えた時に思い浮かんだのは、ローイング選手の宮浦真之氏と古田直輝氏でした。NTT東日本漕艇部の主力選手で、2024年にパリで開催された国際大会に日本代表として出場した、学生時代の先輩であり憧れの選手です。今回の取材では、国内外での活躍を支えるトレーニング方法、大一番に臨むうえでのメンタルケアや実践している生活習慣など、競技だけでなく仕事にも活かせる金言をお聞きすることができました。

8人乗り種目が花形とされるローイングは、「究極の団体スポーツ」と称されます。スポーツ競技のなかでもチームワークが勝敗を分ける特に大きな要因となり、実力者が揃っても息が合わないとボートは進まず、個の力が劣っていてもクルーで動きを揃えて漕ぎ続ければジャイアントキリングを起こすことができます。そのため長年にわたる練習が重要になり、円熟味を増した30代選手の活躍も目立ちます。また、「漕ぎ方が綺麗なクルー・選手ほど速い」と言われており、私は目下のところ2人乗り種目で美しいフォームをシンクロさせることを目指してパートナーと練習に励んでいます。今回の誌面が、世界の第一線で活躍するアスリートのこだわりや競技に懸ける熱い想いだけでなく、ローイングの魅力の一端にふれる機会になれば幸いです。

道端　勇樹
不動産部 横浜営業所

FOREA
フォレア
〈京王・小田急多摩センター駅 徒歩5分〉

「FOREA（フォレア）」は、創立20周年を迎える三信住建の新たなマンションプロジェクトです。多摩の森に着想を得て、日本古来の『庭を通じて四季や豊かさを取り入れる』精神を尊ぶ住まいは、合理性と多様性を兼ね備えた美しい暮らしを実現します。分譲マンションの新たなかたちを求める皆さまに、これからの時代に即した新たな価値を提案してまいります。

2025.10.1

三信住建
本誌に関するお問い合わせ Tel.03-3569-1123
営業部門 広報人材開発部 9:00～17:00（年末年始・土・日・祝日は除く）
●Mail：kyomisinsin@sanshinjk.co.jp